

若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム (ITP)

『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

平成22年度派遣報告書

——インドネシア共和国・ハサヌディン大学・インドネシア語、
派遣期間(H22. 12. 4-H22. 3. 10)——

平成22年入学
大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
博士課程1回生
茅根由佳

自身の研究テーマについて

ジャカルタ州営の水道公社は、1997年に事業効率の改善へ向けて民営化された。過去半世紀の都市近代化、急速な人口増加によってジャカルタの水需要は格段に拡大したが、水道インフラの普及率は未だ低く、代替手段としての地下水の過剰取水が洪水、地盤沈下を深刻化させているためだ。州政府は1997年の経済危機後、世銀・国際金融基金(IMF)からの強い提言を受けて民営化を実施し、二社の外資系大手水道企業に事業を委ねた。しかし両外資は経営状況の悪化から事業を縮小させ始め、代わってスハルト体制時代から勢力を拡大させてきた国内大手企業が経営に乗り出している。国内企業は、メディアやNGOによる外資への批判と民営化政策のアジェンダに乗じて、市場プレゼンスを増加させ事業権の半数以上を獲得した。そこで本研究では、ジャカルタ水道事業を事例として、世銀・IMF、外資に代表されるグローバルな経済勢力と、国内企業、政府、NGO、メディアが民営化アジェンダの下にどのように折衝してきたかを検討する。そして内外の政治経済動向、政権の民活路線、行政政策に関与するアクター間の利害関係を加味したうえで、今日のグローバリゼーションの影響と相互作用を考える。国際経済資本の圧力によってもたらされたかに見える事例の民営化が、果たして国内の政治経済の舞台においてはどのような利権交渉の下に結実し、今後どのように展開していくのか、現状の政策と事業動向を主眼に検討したいと考えている。



写真:ジャカルタ郊外の様子



都市部の状況

研修言語について

インドネシア語は、もともと交易語であったマレー語を起源としている。マレー語はオランダ植民地

時代より、オランダ語とジャワ語やスダ語などの地方言語を仲介するための行政用語として発展した。蘭領統治以前にはサンスクリットやヒンドゥー、アラビア文字や、ジャウィ語の影響が多分に見られ、文字、単語の借用もあったが、植民地政策によりローマ字の使用が普及し現在のインドネシア語の基盤となった。

語学研修の内容について

現地の派遣先であるハサヌディン大学に到着した時点では、自身のインドネシア語の語学力がほとんどゼロであったため、英語でインドネシア語を教授できる講師を探す必要があった。そこでプログラムの担当教官にかけあったが、年末で忙しかったためか、なかなか講師が見つからず、東南アジア研究所の G-COE により設置されていた現地のフィールド・ステーションスタッフに語学の指導を依頼することにした。授業用のテキストは、語学の担当教官のアドバイスを受け、指導を依頼したスタッフとともに書店で選んだ。主に、基本的な単語や文法を習得することを目標とし、日常会話や作文の練習を行う授業が、毎日1時間から2時間ほど行われた。毎回用意される英作文は20ほどで、それを中心に文法事項・単語の確認と発音の練習を行った。また、自身のインドネシア語の研究資料を読解用の教材として使うことで今後の研究に役立つような新出用語に触れ、次回の授業までに暗記してテストを行うことで単語力を強化した。文法的な説明やテキストの読解を行う際には、主に英語で解説をしてもらうこととなったが、質疑応答の際にはできる限りインドネシア語を使用することを心掛けた。さらに、授業を担当してくれたスタッフが、日々の日常生活的な生活面でのサポートも行ってくれたため、授業時間外にもインドネシア語の会話練習をすることができた。

研修期間中に印象に残った体験や経験

期間中は簡単な単語を使い日常会話ができるようになるよう、大学の友人とはなるべくインドネシア語を会話に入れながら練習をしていた。しかし、自身の「日本的」な発音に関しては、友人からしばしば指導が入った。英語やフランス語などと違い、ローマ字表記のうえ、読みもそのままであるし、音自体も比較的日本語に近く、単純にそのまま読めばよいという印象を持っていたということもある。しかしネイティブの彼らは、日本語からすれば区別のつきにくい“N”と“NG”、“L”と“R”などをはっきりと使い分けており、会話の中でも常に適切な発音が教授された。前者の“N”と“NG”の発音はとりわけ区別が難しく、何度練習しても全くなっていない、と笑われ歯がゆい思いをした。発音に関しては比較的楽観的に考えていたにも関わらず、なかなか適切な発音ができず言葉を発しても通じないことが多かったため、今後改めて努力していく必要性を認識した。

目標の達成度や反省点について

マカッサルへの語学研修派遣前には、インドネシア人の友人達から、マカッサルではほとんど英語が通じないので、3ヶ月弱の短期間滞在とはいえ、インドネシア語を身につけるには十分な期間だろうと聞いていた。確かに首都のジャカルタに比べると圧倒的に英語人口は格段に少なく、日常生活において一人で行動する際には、片言でもインドネシア語を使わざるを得ない環境だった。とはいえ、実際に現地では大学の友人と行動を共にすることが多く、彼らの英語力をあてにしてしまったことが、今回の最も大きな反省点であった。というのも、つい安易に英語を使ってしまい、自身の伝えたいことをインドネシア語で言う努力を怠ってしまったためだ。そのため「インドネシア語を勉強しに来ているのだからインドネシア語で」としばしば注意を促されることが多かった。新たな語学を身につけるということには、日常的な努力が必要とされることを強く実感した。



写真:ハサヌディン大学での授業風景